

『緋文字』研究

—“A Dark Necessity”を中心に—

岩山太次郎

一 三つの探求

ナサニエル・ホーソン (1804—1864) の『緋文字』(1850) は非常に多くの問題を含んでいるが、綿密に構成されている作品である。或る批評家は、この作品を内容から四つの発展段階に分け、作品を説明しようとしたが、^①此処では、四人の人物によってなされる三種類の探求から、“a dark necessity” (暗く必然的な運命) という問題を考えてみようと思う。

この作品の中で、ホーソンは単に罪を犯したヘスター・プリンや牧師アーサー・デムズデルが受けるべき運命は斯々であると規定したり、或は罪の子として生れたパールがたどる運命は何ういうものであるかとか、更にはヘスターの夫ロージャ・チリングワース医師はどうあるべきであるか、と

いうようなことを示そうとして、この作品を書いたのではない。だからこの作品について、批評家達が種々な解釈をしているのも当然であると言えよう。^②又、事実ホーソン自身も、例えばこの“a dark necessity”ということについても、はつきりと作品の中で結論を下し得なかつたのではないかとさえ思える点がある。ただホーソンは人間の意志とか精神とかいうものは全く弱いものである (故に罪を犯す) ということと、(神の恩寵は凡ての人間に与えられているように) 神のみが絶対的な力を持ち給えるものである、というこの対照的なものを意識的に解き明かすことにより、一つの結論をこの作品で示そうとしている。ここに『緋文字』のテーマがあるように思える。言い換えれば、「神の救いの力」と「人間の力・努力の空しさ」ということを中心テーマとしている。彼は神が我々の運命を決定し給うのだということには何んら

疑問を抱いていない。ヘスターの肉体的な能力・知性・献身の努力、これら全ては、デイズデールにも、ヘスターにも、どのような力や効果もたらさなかった。それらは全く無駄なものであった。神のみが罪人を救い給えるのである。このことをデイズデールは息を引きとり際に至りはっきりと認識するのである——

“Praised be His name! His will be done!” (p. 292)

しかし一方ヘスターは、デイズデールがこのような悟りに達した時に於いてすら、なお畏怖と疑いの言葉を心に残していた。

このような点から考えれば、この小説は神の絶対的な力を悟り、自からもそれに身も心も委ねたデイズデールが中心となる物語で、最後までそういう信念を持ち得なかったヘスターが中心となっている物語ではないとも言える。このことをヘンリー・ジェイムズは次のように書いている。

The story, indeed, is in a secondary degree that of Hester Prynne; she becomes, really, after the first scene, an accessory figure; it is not upon her the denouement depends. It is upon her guilty lover that the author projects most frequently the cold, thin rays of his fitfully-moving lantern. ②

勿論『緋文字』は、神の救いを得ようとするデイズデールの探求のみをテーマにしているのではない。この探求のテーマには、種類の違った他の二つの探求のテーマが組み合わされているのである。

デイズデールが救いを求めようとする探求は意識的な探求である。たとえば第十二章 (“The Minister's Vigil”——夜デイズデールが夢遊病者の如く、処刑台の上に立つ章)では、自分の死んでいるとも言える魂が、救いを得ようとしているのであるから、無意識的な探求の場合もあると言えても、この行為自身は苦しめるデイズデールが絶えず意識的に救いを求めようとするところから出たものであって、結局は意識的な探求が根底になっている。そして、最後に彼は勝利——これは神が与え給うた勝利なのであるが——を得る。——そういう意識的な探求であって、神の栄光を追求する上昇の線をたどる探求である。このデイズデールの探求は、ヘスターと犯した罪から救われようとするものであるから、当然ヘスターの態度とも不可分となる。

他の二つの探求は、この中心的な苦しみの中の探求の問題の副次的なものであって、一つは「悪」の役割をもったロージャ・チリングワースが姦淫を犯した妻ヘスター・プリンと相手の牧師アーサー・デイズデールの魂を我がものとしようとして、その目的を意識的に追求する探求である。彼の探求の使命は確かに人間としては常軌を逸しており、しかも

それが、第十二章で、夜彼チリングワースが処刑台の上に立っているデイズデールを目撃する時などは、ヘスターに対しても、又デイズデールに対しても、チリングワースは自分の探求の勝利を一時は得たかのように見える。ヘスターもデイズデールも、確かにチリングワースの思いのままに左右されている。ただ一人ヘスターの罪の子パールのみがチリングワースには制禦出来ない複雑な感情をもっている人間のように描かれている。しかし、後半の第十三章以後ではこの関係はすべて逆になり、ヘスターに対しても、デイズデールに対しても、忽ちチリングワースは魔力を失っていき、最後に於いては医者としても破滅に終る。一時は殆んど成功をおさめたという点で、チリングワースの探求の線は上昇したかの如く見えるが、これは明らかに神の栄光には背を向けた、下向の線をたどる探求であり、暗闇の世界へ進むものである。そして彼は人間の病的な過去の世界に属する人間である。

一方、第三の探求はパールによってなされるものである。罪の子として生れたパールではあるが、彼女はそういう過去の出来事の結果、「恥の印」(“badge of shame” p. 125)にのみ止まっている人間ではない。或る時は、デイズデールに神の救いを求めさせる力を、或る時は、ヘスターに生きる力を与える人間なのである。パールのこのような面の一端を、次に引用するデイズデールの言葉は表わしている。

“She [Hester] recognizes... the solemn miracle which

God hath wrought, in the existence of the child. And may she feel, too,—what, methinks, is the very truth,—that this boon was meant, above all things else, to keep the mother's soul alive, and to preserve her from blacker depths of sin into which Satan might else have sought to plunge her! Therefore it is good for this poor, sinful woman that she hath an infant immortality, a being capable of eternal joy or sorrow, confided to her care,—to be trained up by her to righteousness,—to remind her, at every moment, for her fall,—but yet to teach her, as it were by the Creator's sacred pledge, that, if she bring the child to heaven, the child also will bring its parent thither.” (pp. 129-130)

これらの言葉からも分かるようにパールは人間の望みある未来を代表している人間と言えよう。このような使命を帯びたパールの探求をヘスターは最初次のように表現している。

“My child must seek a heavenly Father; she shall never know an earthly one!” (p. 78)

彼女の探求は無意識的なものであり、或る時は運命的にすら感じられる。デイズデールがチリングワースの魔力に陥ちこんで行くにつれて、パールは天の父を求めずに、Black Man を求めるようになるが、最後には自分の天の父を見出

す可能性を表わしている。処刑台上でデイズデールに接吻した後、彼女は生きることに条件を受け入れ、世間に逆らわずに生きる。

Pearl kissed his [Dimmesdale's] lips. A spell was broken. The great scene of grief in which the wild infant bore a part, had developed all her sympathies; and as her tears fell upon her father's cheek, they were the pledge that she would grow up amid human joy and sorrow, nor forever do battle with the world, but be a woman in it. Towards her mother, too, Pearl's errand as a messenger of anguish was all fulfilled. (p. 291)

勿論これらの三つの探求は、夫々違った層に於いてなされる。確かに三つの探求とも、この小説の構成上相互扶助的なものであるが、探求そのものの性質は全く異質なものである。デイズデールの探求は、同時にヘスターの場合もそうであるが、この小説の大半の部分では人間のする普通一般の行為である。彼等の情熱や決心を、仮に一時的にしる人間の行為として我々が認めたとしても、神の目からすれば、結局それは非常に無駄な努力をした人間の行為なのである。デイズデールは「選挙日の説教」をする前夜まで（即ち第二十一章まで）実を結ぶような、積極的に神に結びつくような探求

を何んらしていない。同様にヘスターの非常に行動的なところも全く無駄なものであった。実を結ぶようなものではない。それは人間というものの層に於いてなされるからなのであるが、この小説はこのような人間の層でまず展開して行くのである。この人間の実生活という層の点では、作品で展開される事件も「現実的」であり、作中人物もそうなのであるが、実はこれらの事件や人物は、この人間という層の限界を越えた力により支配された永遠の戦いの印であり、その象徴にしかすぎないのである。冷酷で堅固な決心による目的をもったチャリングワースと、天の父が待っているパールとが更に一層、この永遠の戦いの印である苦悩を強く我々に思い起させている。ヘスターとデイズデールは、最初は別々に、後には一緒に、チャリングワースの影響の下に入る。そして、これらの反動とも言うべきものが、パールに影響する。ヘスターとデイズデールの行為は、どうしても復讐しようとするチャリングワースが自由にパールの世界に侵入して行くのを写す一種の鏡のようなものである。小説の終りに至って初めてこの鏡はチャリングワースに対する輝きを止め、天国から彼を遮断し、彼自身の破滅の姿を写すのである。

このような意味からすれば、パールと医者チャリングワースの探求は、デイズデールやヘスターの探求よりもなお一層人間というものの社会の中での行為としては、現実的或は現世的なものであると言い得よう。しかし、ホーソンはパール

とチリングワースの二人のみが登場する場面を、作品を現世的な層から一步引き上げるために書かなかつた。二人が同時に登場する場面では、ヘスターかデイズデールの何れか、或は双方を必ず一緒に登場させている。パールとチリングワースが顔を合わすのは他の人物の前でのみである。そして、彼等は直接相互に一言も交わさない。前にも述べた如く、パールは未来を表わす人物である。一方、チリングワースは過去を表わす人物である。過去と未来は現在に於いてのみ、即ちヘスターやデイズデールの世界に於いてのみ交わり、意義を持つものである。

この過去、現在、未来という時間的關係は、この小説に屢々現われる「鏡」の象徴によつても説明されている。それらは作中人物の試練の展開の枠となる鏡である。第十四章(Hester and the Physician)で、ヘスターが進んでチリングワースに会い、呪いを解くように嘆願する場面の小川の水溜りは過去と未来の接触を象徴している。

All these giant trees and boulders of granite seemed intent on making a mystery of the course of this small brook; fearing, perhaps, that, with its never-ceasing loquacity, it should whisper tales out of the heart of the old forest whence it flowed, or mirror its revelations on the smooth surface of a pool. (pp. 211-212)

これは「人間の法則にも従わず、またより高い真理にも照らされない、森の荒涼たる大自然」(“that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth” p. 231)を暗示している。

この「荒涼たる大自然」は、死んだようではあるが、目をくめるめかすような秘密——選ばれたものに対する神の救いの約束を大自然に対して拒むような秘密——で過去を隠すことを欲している自然なのである。アダムが過ちを犯して以来神が絶えず働きかけ給う現在は、すぐ過ぎ去る一瞬間にしかすぎないが、人間の本性はそのような東の間の瞬間を求めているのである。時というものは、永遠のドラマの一場面にしかすぎない。人間の生は短く、すぐ消え去って行く。その人間の東の間の生が、ホーソンの第二の鏡で示されているのである。

“The soul beheld its features in the mirror of the passing moment.” (p. 216)

更に未来についての鏡は、パールによつて象徴されている鏡である。この小説の最後の鏡の象徴は、小川に写ったパールの鏡であるが、この小川はパールの神秘性を写して流れ、同時に過去の秘密を明かさぬものであり、真実な洗練されたパールの未来を示している。それは「現在よりもより洗練された又精神的な小さな姿の完全なイメージ」(“a perfect image of her little figure...more refined and spiritualized

than the reality” p. 237) を写している。この最後の鏡に写ったのは、パールが緋文字のAをつけていない母の胸をさして対岸に停立する姿であり、虚偽の未来を拒否するパールを写しているのである。この鏡は、ヘスターが最初パールの運命だと想像していたものを否定し、淵に写ったパールの可能性を肯定するものである。このように、これら三つの鏡は、恐ろしいが逃れられない人間の過去の事実、東の間の現在への挑戦、更には未来に実現する神の約束を写すものであると言えよう。

過去の結果にせよ、未来への希望にせよ、それは現在の考えや行いの故にのみ人間には意義がある。『緋文字』に於いては、ヘスターやデイズデール、或は社会が又社会の人達が織りなす現実の層は、二つの象徴的な世界により関係づけられている。一つは過去に置き換えられる世界、下の世界から恐怖を与えるような象徴の世界の層、他は未来に置き換えられる世界、現世が我々に与えるより以上のものを約束する希望のある象徴の世界の層である。これは暗闇の世界と明るみの世界とも言い得よう。全能の神は、あらゆる結果が種々な事柄より必然的に起こるべきものであることを知った存在である。故にチリングワースやパールの運命も、ヘスターやデイズデールの行為のためによってのみ形成されるものではなく、むしろこれら四人物の生活全体の相互関係により形成されることを知っている。神の御心もそこに顕われている

と言えよう。

『緋文字』は神の救いと人間の無力ということテーマとして、このような様々な層に於いて、三つの探求が展開されているのである。

Ⅱ ヘスターの態度とデイズデール

Ⅰ 探求

第一章 (“The Prison-Door”) の牢獄の扉や墓地と牢獄の前の叢に咲いている薔薇の花は、暗闇と光、過去と未来、悪と善、醜と美、というような対照的なものを象徴的に暗示している。これらはこの作品では極く自然な象徴である。H・H・ワゴナー (Hyatt H. Waggoner) はこれを次のように説明している。

The cemetery and the prison are negative values, in some sense evils. The rose is a positive value, beautiful, in some sense a good. But the cemetery and the prison are not negative in the same sense: death, “the last great enemy,” is a natural evil, resulting as some theologians would have it from moral evil but distinguished by coming to saint and sinner alike; the prison is a reminder of the present actuality of moral evil. Natural and moral evil, then, death and sin, are here

suggested. The rose is "good" in the same sense in which the cemetery is an "evil": its beauty is neither moral nor immoral but is certainly a positive value.

叢の薔薇の花は、罪人にとつては「大自然の深い心は憐れみ親切である」("the deep heart of Nature could pity and be kind..." p. 56) ことの証拠として映るが、森の中のヘスターとデイルの会遇の場面で強調されているように、ホーソンには神の救いとしては、これだけで充分であるとは思えなかつた。しかし、それとしても、「人間の法則にも従わず、またより高い真理にも照らされぬ」、この森の荒涼たる大自然」("that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth" p. 231) には確かに「人間の精神に」「大自然の共鳴」(the sympathy of Nature) とつたわらぬものがある。生は悉くが暗黒に満ちているのではないが、常に「人間というものの無常と悲哀を述べた話」("a tale of human frailty and sorrow" p. 56) に満ちている。というのは、古くニヒール・イングラントの創始者が、「人間の徳義と幸福に満ちた楽園」("Utopia of human virtue and happiness" p. 55) を建設しようとして、処女地の一部を墓地に、一部を監獄にあてて以来、罪悪を犯した人は、この「文明の悪の華、監獄」("the black flower of civilized society, a prison" p. 56)

に呪われているのであるから。作者はこの冒頭の章に於いて罪を犯し死の判決を受けた人間を描写する。しかし、その犯罪者の心は moral virtue と natural beauty により、本當に救われるとまづ言えないにしても、和らげられ、軽くされ得るものであることを、これらの森や薔薇の花の象徴を通して言っている。更にそれは神の恩寵の顧われともなるのである。小説の最後の言葉は、罪は死に於いても生と同じく、決定的な力をもつものであると刻んだ次のような墓碑名なのであるが。

It bore a device, a herald's wording of which might serve for a motto and brief description of our now concluded legend; so sombre is it, and relieved only by one everglowing point of light gloomier than the shadow:—

"ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES."
(p. 300)

この物語は墓石の陰よりもなお一層陰鬱な光が一条永久に燃えているからいくらか明かるくなっているのである。いかなる地上の暗き陰といえども、人間の運命よりも暗いものはない。しかし、それはいかに暗くとも神の蔽しい御旨の内には苦しみの後に得られる明かるい救いがある。

第五章 (“Hester at her Needle”) 第十三章 (“Another View of Hester”) 及び第二十一章 (“The New England Holiday”) と第二十二章 (“The Procession”) に於て、当時の社会の人達について、更に彼等とハスターの關係についてが述べられている。社会の人達はハスターを最初は批難するが、後には尊敬し、最後には許す。これは視点を變えれば、社会の人達が感わされているのである。社会に於いては正として通用する觀念や、ハスターが罰を受けたからといって或る程度は良くなるというようなことは、決して真には存在し得ない。それだけでは「緋文字は、まだその役目をはたし終っていないかった」 (“The scarlet letter had not done its office” p. 189) ののである。ただハスター自身も途方にくれて色々なことをするだけなのである。第五章の主題はハスターの苦しみであり、又、第十三章のそれは意志の強さなのであるが、それは単に、身も心も一時的なもの、取るに足らぬつまらぬものへの奉仕に向けられているだけなのである。ハスターは最初から人間としての法則にすら反抗しているが、これは絶対に是認されないものである。彼女は更に神の法則にすら反抗する。故に彼女は次のように考えたのである。

...she deemed herself connected [with Dimmesdale] in a union, that, unrecognized on earth, would bring them together before the bar of final judgement, and make that their marriage-altar... (p. 91)

これは是認されないものである。ハスターの心が病的であることを言えよう。事実、ハスターの心には、「真実のそして着実な悔悟ではなくて、何か疑わしげな、そして内部に根深く過誤をひそめていた」 (“no genuine and steadfast penitence, but something doubtful, something that might be deeply wrong, beneath.” p. 95) ところがあったと強調をえられている。しかし、ハスターをこのようにまでさせた社会にも責任はあった。この小説の背景となっている十七世紀のニュー・イングランドでは、宗教と社会法則は既に同一視されていたような社会であった。

...as befitted a people amongst whom religion and law were almost identical and in whose character both were thoroughly interfused, that the mildest and the severest acts of public discipline were alike made venerable and awful. (pp. 57-58)

罪人が処刑台の上に立って、このような傍観者から求め得る同情というものは、実に貧しく冷たかったのであった。罪を犯した女を牢獄に投じ、しかもその社会上の立場を全く踏みにじろうとする当時のピューリタニズムは、初期の新鮮な宗教的な生気は既に失っていたのである。そこでは、ハスターが自分の場合の判断を自分で常にしようとするのも実は当然であろう。第十三章では、

[Hester was] little accustomed, in her long seclusion from society, to measure her ideas of right and wrong by any standard external to herself. (p. 181)

という文章で表わされてゐるように、ヘスターは自から判断をしようとしたのである。

このような社会に対するヘスターの態度は彼女の「大理石のような冷たさ」(“marble coldness” p. 186) という性格にも関係がある。

Much of the marble coldness of Hester's impression was to be attributed to the circumstance, that her life had turned, in a great measure, from passion and feeling, to thought. Standing alone in the world,—alone, as to any dependence on society, and with little Pearl to be guided and protected,—alone, and hopeless of retrieving her position, even had she not scorned to consider it desirable,—she cast away the fragments of a broken chain. The world's law was no law for her mind. (pp. 186-187)

このようなヘスターの精神的な苦しみが、彼女に本当に悔悟させたのではなくて、かえって彼女を傲慢にまでさせ、自分の力の限界を越えたデイズデールを救うということに

向かわせたのである。其処に於いてもヘスターは自分の法則を打ち樹てゐる。「彼女は出来るだけ自分の過誤を償おうと決心した」(“She determined to redeem her error, so far as it might yet be possible” p. 190) というのは、自分の法則に従つたまでなのである。ヘスターはチリングワースにデイズデールを苦しみに陥しめずに許してあげて欲しいと嘆願する。

“...for the hatred that has transformed a wise and just man to a fiend! Wilt thou yet purge it out of thee, and be once more human? If not for his sake, then doubly for thine own! Forgive, and leave his further retribution to the Power that claims it! I said...that there could be no good event for him, or thee, or me, who are here wandering together in this gloomy maze of evil...” (p. 197)

勿論これは不可能なことではあった。我々は彼女のこの勇氣に同情すら感じ、彼女の社会に対する行いの道徳的な点を賞讃をえするのであるが、彼女のこの試みが、真実の意味では、無益であったことを忘れることは出来ない。そのことは、第二十一章及び第二十二章に明瞭に表現されている。チリングワースも自分達(デイズデールとパールとヘスター自身)と同船しヨーロッパへ行くということを知った時のヘスター

の心は、「表に現われたよりも心の中では一層驚いた」(“star-tied more than she permitted to appear” p. 268) とか
「心づく狼狽した」(“in the utmost consternation” p. 268)
とか、或は、「恐ろしい難関に彼女の心は苦しめられた」
“her mind [was] harassed by..terrible perplexity” p.
280)とどうよした表現をされている。処刑台の上で彼女が魔法
の企みを払いのけようとする必死の努力も、又、彼女がデ
ィムズゲールにヨーロッパで共に生活するようになつて嘆願する時
彼が一言の譴責をも言わせず同意をせよと努力すること
も、結局は、ディムズゲールが自分達の過ちをクスターと思
つ起つたせ、且つは又、自分を救つてくれた主を讃えること
にならねばならぬ。

“Shall we not meet again?” whispered she [Hester],
bending her face down close to his [Dimmesdale’s].
“Shall we not spend our immortal life together?
Surely, surely, we have ransomed one another, with
all this woe! Thou lookest far into eternity, with
those bright dying eyes! Then tell me what thou
seest?”

“Hush, Haster, hush!” said he, with tremulous
solemnity, “The law we broke!—the sin here so
awfully revealed!—let these alone be in thy thoughts!

I fear! I fear! It may be, that, when we forgot our
God,—when we violated our reverence each for the
other’s soul,—it was thenceforth vain to hope that
we could meet hereafter, in an everlasting and pure
reunion. God knows; and He is merciful! He hath
proved his mercy, most of all, in my afflictions. By
giving me this burning torture to bear upon my breast!
By sending yonder dark and terrible old man, to keep
the torture always at red-heat! By bringing me hither,
to die this death of triumphant ignominy before the
people! Had either of these agonies been wanting, I
had been lost forever! Praised be his name! His
will be done! Farewell!” (pp. 291-292)

これはクスターにとっては残酷なまでの人生の実態である
かも知れない。しかし此処にホーソンの『緋文字』を貫いて
いる神の意識にもとづいた人生観があると言ふべき。

III チリングワースの探求

チリングワースは第四章(“The Interview”)と第十四章
(“Hester and the Physician”)で、自分の探求の意味を説
明しようとする。この二つの章でチリングワースの性格の上で重
要な発展がみられる。彼は真理を求めて読書に没頭し、錬金術

金を造ろうとし、又蠻地での滞在中に多くの新しい知識を得て来た学者であり、医者であった。彼は最初は自信に満ちていたが、後にそれがこうして一人よがりになる。そして、彼は自分の知力によりハスターの心を支配し、ディムズデールに自から罪を告白させるだけの自信があると思うようになる。チリングワースは蠻地での自分の滞在を、社会で二人に復讐をする準備期間とさえ考えているのである。彼はハールに対してだけは、自分の神秘的な薬種の力が充分に効果を現わすとは思っていないが、他の二人に対しては、その効果に自信があり、それを用いようとする。故に彼はハスターに、「お前もお前の大切な者達も……わしにひいてやるのだ」(“Thou and thine...belong to me.” p. 87)と言ったり、ディムズデールのことについて、「世間的の名誉に隠れられるものなり、それでもって身を隠しておくがよい。だがなんと言ったってその男がわしのものであることには変りないのだ」(“Let him hide himself in outward honor, if he may! Not the less he shall be mine. p. 86)と言っているのである。しかしてチリングワースがふと口にして認容した言葉は——“Mine was the first wrong” (p. 85)——自からの敗北を既に予見しているようである。その後、チリングワースは自分の内に本當の悪がひそんでいること——これは神の定め給うた運命なのであるが——を自分のイマジネーションという鏡を通して見る。それはこの小説の最後のシーンに於いて、チリングワ

ースが精神に於いても又肉体に於いても破滅することを象徴しているのである。自分の心はディムズデールに対する時、悪魔になつていふと彼は言う。

“With the superstition common to his [Dimmesdale's] brotherhood, he fancied himself given over to a fiend, to be tortured with frightful dreams, and desperate thoughts, the sting of remorse, and despair of pardon; as a foretaste of what awaits him beyond the grave. But it was the constant shadow of my presence!—the closest propinquity of the man whom he had most vilely wronged!—and who had grown to exist only by this perpetual poison of the direst revenge! Yea, indeed!—he did not err!—there was a fiend at his elbow! A mortal man, with once a human heart, has become a fiend for his especial torment!”

The unfortunate physician, while uttering these words, lifted his hands with a look of horror, as if he had beheld some frightful shape, which he could not recognize, usurping the place of his own image in a glass. It was one of those moments—which sometimes occur only at the interval of years—when a man's moral aspect is faithfully revealed to his mind's eye. Not improbably, he had never before viewed

himself as he did now. (p. 195)

我々はチリングワースがディムズデルの魂を破滅させようとしている時に、神の御心がこの医者の魂に顕われているように思うのである。ハスターやディムズデルは勿論、パール的心をも、すべて意のままに動かしているとチングワースは思っていたにも拘らず、事實は自分も将棋盤の上の一つの駒にしかすぎない存在であると感ずる。

“It is not granted me to pardon. I have no such power as thou tellest me of. My old faith, long forgotten, comes back to me, and explains all that we do, and all we suffer. By thy first step away, thou didst plant the germ of evil; but since that moment, it has all been a dark necessity. Ye that have wronged me are not sinful, save in a kind of typical illusion; neither am I fiend-like, who have snatched a fiend's office from his hands. It is our fate. Let the black flower blossom as it may! Now go thy ways, and deal as thou wilt with yonder man.” (p. 198)

ハスターは自分のみがチリングワースの心の内的変化を知ることが出来ると思っていたが、チリングワースは彼女よりものはるかによく事態を知っていたのである。何故なら彼は悪

魔をその心の中に住まわせていて、特殊な洞察力を持った人間なのであるからである。しかし世の法則というものは、*“a dark necessity”* により決定されているのである。罪というものは自分達にだけ存在するものだと人間は思っているが、実はその罪すら神に帰属するものなのである。「わしにひどい仕打ちをしたお前も、ただ誰にでもある幻想的な考え方をするのでなければ罪があるのではない……」。すべての人間は、「不幸な芽を植えつけられた」運命を持っているか、或は、善の運命を持っているのであって、自分達の意志によって生きていくのではない。人間は神の御心の道具にしかすぎないのである。このような存在である人間には、チリングワースの言葉にもあるように、人間と人間の間の許し合いなどは意味のないものであり、仮にそれがなされたとしても、全く無駄なことなのである。同様に、チリングワースがハスターやディムズデルにしようとした復讐も、あくまで人間の間での行為であって、仮に彼が復讐に於いて、勝利を得たところで、それは人間の本質になら決定的な意義をもつものではない。人間は人間の力の及ばないものによって動かされているのである。チリングワースの復讐も決して意義をもち得ないものである。

このような点からすれば、チリングワースが当初から積極的に追求しようとしたことは、全く暗闇の世界での行為であり、神の力を否定するところになされる探求なのである。決

して明るみの世界で成しとげられるものではないのである。正にチリングワースは、ヘスターやディムズデルを、又、パールを、更には我々を暗闇の世界へ導く悪の agent と言ふ得よう。

IV パールの探求

同じ第十四章で、ヘスターは自からの空しさを知って、すべての人間には同じような暗い運命が待っているのだと、チリングワースに熱心に語る。

“There is no good for him,—no good for me,—no good for thee! There is no good for little Pearl! There is no path to guide us out of this dismal maze!” (p. 197)

このようなヘスターの考え方は、自からが法則を造り生きようとするものであって、第二章でみた如く、本当の意味で明るみの世界を求める正しい考え方とは言い得ないのである。自分では明るみの世界を求めている態度であると思っていたヘスターは、特にパールに対し誤った考え方をしていた。パールが母親の眼を通して見られる第六章 (“Pearl”) では、パールの野性的な性質が強調されている。彼女の野性味、憎悪の念・敵対心、「心の中の葛藤」、これらはすべてヘスターから受け継いだものである。パールの眼の中の小さい黒い鏡

(“the small black mirror of Pearl's eyes” p. 110) と笑っている小さな悪魔の姿 (“little, laughing image of a fiend” p. 111) がのぞいてくるのが或る時ヘスターの目に写る。

Once, this freakish, elfish cast came into the child's eyes, while Hester was looking at her own image in them, as mothers are fond of doing; and, suddenly, —for women in solitude, and with troubled hearts, are pestered with unaccountable delusions,—she fancied that she beheld, not her own miniature portrait, but another face, in the small black mirror of Pearl's eye. It was a face, fiend-like, full of smiling malice, yet bearing the semblance of features that she had known full well, though seldom with a smile, and never with malice in them. It was as if an evil spirit possessed the child, and had just then peeped forth in mockery. Many a time afterwards had Hester been tortured, though less vividly, by the same illusion. (p. 110)

パールの眼に写った過去の罪の姿は、現実の自分の姿とは違うが、未だ現実で償い、救われていない自分の姿として、ヘスターには感じられたのである。そしてその鏡がヘスターに「可愛いパールのためにもよいことはないのです」という見方をさせたのは、社会の敵しさが彼女に植えつけた恐怖

憎悪、堅固な決意などなのである。尤もこの鏡のイメージはヘスターの心の中に出来たものであるから、パールルの真実の姿でないと見えよう。しかし、ヘスターがパールルに希望した天の父を求めることは反対に、パールルが「天の父が私をおよこしになったのではないのよ……私には天のお父さまってない。」(“He did not send me!...I have no Heavenly Father!” p. 112)と言ったのは、悪魔がパールルに教唆したからなのである。このパールルの言葉は彼女の一面を表わすものであるが、この章に続く二つの章(第七章“*The Governor's Hall*”と第八章“*The Elf-Child and the Minister*”)では、社会の人達のパールル観が述べられている。それは前記のような考え方と対比するものである。社会の人達は、パールルが「饗宴の長の御子達」(“*children of the Lord Mistrule*” p. 123)——これは知事クリンガムが言った言葉——とか、「いたづらな悪魔の子か妖女の子の一人」(“*One of those naughty elfs or faeries*”)——これはトリングワースが言った言葉——とか、「妖術を知った小さなお転婆」(“*little baggage with witchcraft in her*” p. 131)——これもトリングワースとか呼ぶのである。厳格な当時のペーリリタンにとっては、パールルは罪より生れた子供なのであるから、人間として見るに耐えない存在であり、このように言われるのも当然であった。そして、このような当時の人達の考え方がヘスターに反映することも又当然なことである。事実ヘスタ

ーも最初は、パールルがそのような子供であると思っていたのである。

しかし、この小説に於いて、パールルもっている役割はどのように単純なものではなかった。この小説の中で、パールルには二つの鏡の象徴があるが、その一つが第七章にある。クリンガム知事の広間の甲冑が凸面鏡となり、来たるべきヘスターの運命を象徴しているような巨大な緋文字だけがその中に写っているのをパールルが見る。それはヘスターの罪の化身であり、ヘスターの姿はその字に象徴されている。

Little Pearl—who was greatly pleased with the gleaming armor as she had been with the glittering frontispiece of the house—spent some time looking into the polished mirror of the breastplate.

“Mother,” cried she, “I see you here, Look! Look!”
Hester looked, by way of humoring the child; and she saw that, owing to the peculiar effect of this convex mirror, the scarlet letter was represented in exaggerated and gigantic proportions, so as to be greatly the most prominent feature of her appearance. In truth, she seemed absolutely hidden behind it. Pearl pointed upward, also, at a similar picture in the head-piece; smiling at her mother, with the elfish intelli-

gence that was so familiar an expression on her small physiognomy. That look of naughty merriment was likewise reflected in the mirror, with so much breadth and intensity of effect, that it made Hester Prynne feel as if it could not be the image of her own child, but of an imp who was seeking to mould itself into Pearl's shape. (pp. 119-120)

此処に於いては、パールはハスターには完全に「悪鬼の子」として認められている。

もう一つのパールの鏡の象徴は第十四章にある。其処では、森の小川の淵の中に、パールは自分を「よりよき地」に招いている。「幻の小娘」(“visionary little maid” p. 191) を見る。彼女は未来に於て、選ばれることの可能性をもっていると同時に、呪われることも予期出来るのである。彼女の運命は、他の人の運命とは異って、処刑台上での最後の場面まで、二つの運命の可能性が均衡を保って読者に示されている。

このようなパールの二面性にハスターは既に気づいていた。パールは単に悪の役割をもった罪の子としてのみあるのではなく、それ以上の力をハスターに与える存在であること、ハスターは認識し始めている。ハスターはパールを次のように思う。

...there was love in the child's heart, although it

mostly revealed itself in passion. (p. 131)

そしてこの章の終りで、ハスターがヒビンスの申し出を拒絶する時に、^⑥ホーソンはパールの役割を、「かくも幼い頃から、子供は母ハスターを悪魔の罠から救ったのであった」(“Even thus early had the child save her [Hester] from Satan's snare” p. 132) と説明している。

パールのこの役割が更に明瞭に示されるのは、第十五章(“Hester and Pearl”)と第十六章(“A Forest Walk”)に於いてであって、其処ではパールには「善」があるということが予見されている。ハスターはパールが自分の胸に海藻でAの文字を作って附けるのを見て、緋文字は意味を持っているが、パールの海藻で作った緑のシンボルには意味がないと語り、次いでハスターは次の様に考える。——

...now the idea came strongly into Hester's mind, that Pearl, with her remarkable precocity and acuteness, might already have approached the age when she could be made a friend, and intrusted with as much of her mother's sorrows as could be imparted, without irreverence either to the parent or the child. In the little chaos of Pearl's character, there might be seen emerging—and could have been, from the very first—the steadfast principles of an unflinching courage,—

an uncontrollable will,—a sturdy pride, which might be disciplined into self-respect,—and a bitter scorn of many things, which, when examined, might be found to have the taint of falsehood in them. She possessed affections, too, though hitherto acrid and disagreeable, as are the richest flavors of unripe fruit. (p. 204)

ここに未だは、きりした形をとらないパールは、性格には、ひるまない勇氣、しっかりと誇、虚偽をせぬこと、実を結ぶ愛の力等のきざしが見られる。そして、ハスターもパールの運命を正しく理解し始める。

Hester had often fancied that Providence had a design of justice and retribution, in endowing the child with this marked propensity; but never, until now, had she bethought herself to ask, whether, linked with that design, there might not likewise be a purpose of mercy and beneficence. If little Pearl were entertained with faith and trust, as a spirit messenger no less than earthly child, might it not be her errand to soothe away the sorrow that lay cold in her mother's heart, and converted it into a tomb?—and to help her to overcome the passion, once so wild, and even yet neither dead nor asleep, but only imprisoned within

the same tomb-like heart? (p. 205)

更に、ホーンソンはパールの「善」がハスターだけに認められるのではなく、他の人達にも「善」であるという証拠に、処刑台上でパールがディムズデルにする接吻によって、魔法が解かれる時に、パールを中心とした第二の人達として一般民衆を用意しているのである。ここに至って、「彼女は将来人間的な喜びや悲しみのなかに生長して、最早永久に世間と戦うことはせず、世間に交わって一人前の女になる。」

“she would grow up amid human joy and sorrow, nor forever do battle with the world, but be a woman in it” p. 291) ということがパールの性格上確実なものになって来るのである。尤もこれはパールの生活が本当に「幸福」なものになるということを意味しているのではなく、未来に於いてパールは「新しい世界に於いて、その時代の最も金持の後嗣娘」(“the richest heiress of her day, in the New World” p. 296) になり得ることを意味しているにすぎない。パールは次に述べるディムズデルのようには完全に明るみの世界に出る存在ではなく、そういう世界に出られる可能性をひめた存在であるということである。

このようなパールが可能性をひめた人物であるということ、は、「パール」という名前がもっている象徴性に於いても言い得ることであつて、それは天国或は輝かしき未来へのたく

いなき価値をもった“pearl of great price”に名前の由来があることから説明出来るものである。

V ディムズデールの探求の勝利

先にも述べた如く、ヘスターの態度、チリングワースやパールの探求は、実はディムズデールの探求の副次的なものであって、第九章から第十一章(“The Leech,” “The Leech and His Patient,” “The Interior of a Heart”)の間に描かれてゐる、非情なチリングワースの下での、ディムズデールの意志と精神の漸次の崩壊がこの小説に於いては重要な問題となつてくるのである。ディムズデールは、自からの罪を告白せずに隠す間は、罪人として苦しみ、悩まなければならぬ。この苦しみ悩み、から解放され、救われる道はただ一つ、神の絶対性を認め、告白することであつた。チリングワースは、二人の罪人に復讐を加えようとして心を砕くが、その間、彼は正義感により精神的に高められず、かえつて極悪非道性を増すのみであつた。この一つの罪に關係して人間の心の中の最も深いところの魂が揺り動かされるのはディムズデールであつた。チリングワースの復讐しようとする癡猛非道なる態度行為は、ディムズデールの人間としての苦悶と対照的である。ディムズデールの苦悶は、勝利に通ずる苦悶であつた——「彼もその勝利に至るまでは苦悶をつづけねばならぬ。その間のおそらくは人間的な苦悶であつた」(“the

perhance mortal agony through which he must struggle towards his triumph.” (p. 145) 勿論彼自身はこの苦悶が勝利に通ずるものであるとは最初から確信を持っていたのではない。ここにディムズデールのチリングワースに対する弱みがあつた。彼の弱みは、人間がこの場合罪の告白以外では神の恩寵を受けることが出来ないにも拘らず、この微妙な神の御心を悟らない弱みであつた。チリングワースはこのような意味とは違つて、ディムズデールに罪の告白をさせようとした。彼によれば、「自然のあらゆる力は皆罪を告白することを熱心に要求しており」(“All the powers of nature call so earnestly for the confession of sin” p. 148) この自然の力を恃みにチリングワースはディムズデールに対抗してゐた。しかし、ディムズデールは自分の精神的墮落を知つて、「あらゆるものの中で最も惨めな彼自身を憎み」(“...above all things else, he loathed his miserable self!” p. 164) 彼は「告白」が「自然の力」によるのではなく、神の力によるものであることを知ることが出来た。

“There can be, if I forebode aright, no power, short of the Divine mercy, to disclose, whether by uttered words, or by type or emblem, the secrets that may be buried with a human heart.” (p. 149)

抵抗し難き神の恩恵は、自からの墮落を正しく認識する内

にあつたのだ。難行苦行 (penance) は悔悟 (penitence) にはならない。デイズデールの書斎での答は、彼が罪を告白しないで、秘密にしておこうとすることの償いとはならない。この状態での彼の生活は、「我々の周囲にある現実のあらゆるものから、その真髓の力を盗み去られるほど虚偽」 ("so false... that it steals the pith and substance out of whatever realities there are around us" p. 165) に満ちていた生活であつたと説明されている。これは虚偽の生活であつたから、彼はチリングワースの意のままになつて行つたのだ。しかし、告白することの内に神の愛を知つたところにデイズデールの勝利があつたのである。

デイズデールこそは本當の鏡で自分を見ることが出来た人物であつた。彼はその鏡の中にあらゆるものを見ることが出来た——悪魔、天使、死んだ両親や友人、更にはハスターやパール等もその鏡に写っているのを見た。なかでも鏡に写つた自分の墮落の姿が、彼に決定的な力を与えてくれたのである。

To the untrue man, the whole universe is false,—it is impalpable,—it shrinks to nothing within his grasp. And he himself, in so far as he shows himself in a false light, becomes a shadow, or indeed, ceases to exist. (p. 165)

カルビン主義者たちはこのような精神の墮落と敗北からのみ靈的更生は生れるものであると考へている。デイズデールの魂は漸次墮落して行くのであるが、神による魂の更生は決して漸次現われるものではない。人間の行為は何如に緩慢なものであろうと、神の御心は瞬間に現われるものである。それ故に、ホーソンは第十七章から第二十章 ("The Pastor and His Parishoner," "A Flood of Sunshine," "The Child at the Brook-Side," "The Minister in a Maze") までを来るべきクライマックスへの手がかりとしたのである。小説の初めで示されるデイズデールの探求の方向や意義はここで新しく強調される。

"As concerns the good which I may appear to do, I have no faith in it. It must needs be a delusion. What can a ruined soul, like mine, effect towards the redemption of other souls?—or a polluted soul towards their purification?" (p. 217)

又、

"Of penance, I have had enough! Of penitence, there has been none!" (p. 218)

人間の間での許し合いが神にも通ずると信じたり、自分たちの罪が決して「この世での最悪のものではない」 (p. 222)

と考えたりしたデイズデールの心に、神はその恩寵により、自己反訴をさせ給うたのである。ヘスターがデイズデールと二人で地上の幸福を求めようと希望したことは、神から逃がれようとするペセティックな努力であり、喜劇的とすらデイズデールは今では思うようになったのである。だから、この場面では、ホーソンはチリングワースが第四章(“The Interview”)でヘスターに彼女の恋人の魂を破滅させるのだと言った時と同じように、ヘスターにアイロニーを示している。ヘスターが劇的に、「あなたを一人では行かせません！」(“Thou shalt not go alone!” p. 226)と囁く時にも、この牧師と一緒に、微笑しながら共にいようとしているのは、他ならぬ神なのである。

第二十章は非常に重要な章であつて、ここには二つのことが言われている。神の救いを狡猾に得ようとする人間は、いくら努力してもそれを得ることが出来ないということを語る一方、ここでは抵抗し難き神の恩寵がデイズデールの上に直接及ぶことを語っている。彼はヘスターとの会遇によって力を得たのではなく、その後での悪の絶えざる説得により完全に屈し、ヘスターがあれば恐れていた迷路に入り込んだのである。しかし、其処より出る路が彼の眼前にはあつた。神はデイズデールに話しかけ、彼が選ばれていることを確信させる。これはこの章の終りのところに明示されている。チリングワースはこの牧師と生活を共にするようになった直

後、

“...saintly men, who walk with God on earth, would fain be away, to walk with him on the golden pavements of the New Jerusalem.” (p. 138)

とデイズデールに言うが、今や、デイズデールの地上での神もない苦しい歩みは終わったのである。チリングワースは自分の探求の勝利を目前にして、(デイズデールはチリングワースに勝利を思わせるほど衰弱して死者の様相を呈していたのであるが)皮肉に「立派な人の祈禱」(“a good man's prayer”)を「主自身の造幣所の印の押してある新しいエルサレムの通貨」(“the current gold coin of the New Jerusalem, with the King's own mint-mark on them!” p. 256)に譬えて言う。しかしこのように言うチリングワースに答えたのは神であつた。神の目からすれば、このような決定的な瞬間に於いてさえ、チリングワースが不幸にも身に宿していた悪事よりのそれは表現なのであるが、彼がここで完全に自己の探求目的に於いて躓づくのは当然と言えよう。ホーソンは神の返答をデイズデールにさせるが、彼はその返答をする前に非常な苦しみを経験しなければならなかつた。森の中でヘスターの逃亡計画に一時は同意を示しかけたデイズデールは、翌日自分がする選挙祝賀説教を前にして苦しい経験をやる。この経験を通し彼は完全にピューリタンにな

りきつたのである。森からの帰途、彼は悪魔に誘惑をれて、村の人達に冒瀆の言葉を吐く。しかし自分の部屋にもどった彼は、書きかけておいた祝賀説教の原稿をやりすて、神が乗り移ったように、猛烈ないきおいで新しく原稿を書き始める。これこそチリングワースに対する確乎たる返答であり、自分自身の罪を告白するという信仰の信念であった。ディムズデールの心の葛藤は最後にはチリングワースを、悪魔を、足もとにふみつけることの出来る確信をもたらしたのである。心の葛藤と苦悶のないところには、神の与え給う恵み、徳性はなかった。この大きな苦悶の闘いが彼を絶望のどん底から救いの世界へと導いたのである。

...flinging the already written pages of the Election Sermon into the fire, he forthwith began another, which he wrote with such an impulsive flow of thought and emotion, that he fancied himself inspired; and only wondered that Heaven should see fit to transmit the grand and solemn music of its oracles through so foul an organ-pipe as he. However, leaving that mystery to solve itself, or go unsolved forever, he drove his task onward, with earnest haste and ecstasy. Thus the night fled away, as if it were a winged steed, and he careering on it; morning came, and

peeped, blushing, through the curtains; and at last sunrise threw a golden beam into the study, and laid it right across the minister's bedazzled eyes. (pp. 256-257)

過去の生活は火の中へ投げ込まれ、汚れた罪人は、理性の限界を越えた神の恩寵を受け入れる。チリングワースの力も、今はもう以前のように、ディムズデールに及ばない。

“Ha, tempter! Methinks thou art too late! Thy power is not what it was! With God's help, I shall escape thee now!” (p. 284)

新しく選ばれた人は、チリングワースからも逃がれ、欣喜して、心の暗闇から救いの明るみの世界へと入って行く。其処には処刑台上で受ける神の恩寵の確信があった。処刑台の上は「森の中で夢見た処よりもはるかに良き場所であった」(p. 288)のである。であるから、処刑台に登ったディムズデールは次のようにドヒュー・イングラントの住民に叫びかけられたのである。

“...behold me here, the one sinner of the world! At last!—at last!—I stand upon the spot where, seven years since, I should have stood.... Lo, the scarlet letter which Hester wears! Ye have all shuddered

at it! Wherever her walk hath been...it hath cast a lurid gleam of awe and horrible repugnance round about her. But there stood one in the midst of you, at whose brand of sin and infamy ye have not shuddered!" (pp. 289-290)

更に續けて

"Now, at the death-hour, he stands up before you! He bids you look again at Hester's scarlet letter! He tells you, that, with all its mysterious horror, it is but the shadow of what he bears on his own breast, and that even this, his own red stigma, is no more than the type of what has seared his inmost heart!" (p. 290)

そして、ディムズデールはチリングワースに、「神様が君を許して下さいることを祈る。君もまた大きな罪を犯した」("May God forgive thee!...Thou, too, hast deeply sinned!" p. 291)と言った後、ホールに接吻を求め、ハスターに神の恵みを説いて、この罪の試練さえも、己を救い給う神の御心であったことを感謝し、神を讃える。ここに於いて、ディムズデールは神の栄光の明るみの世界に完全に出たのである。しかし、ハスターは、ディムズデールのこのよりな言

葉をぼんやりとは感じながらも、心に於いて真には把握出来なかった。彼女に残るのは次のような言葉であった。

"I know not! I know not!...Better? Yea; so we may both die, and little Pearl die with us!" (p. 288)

ディムズデール、ハスター、パール、チリングワースの四人の内、自分達の探求で、本当に明るみの世界へ出て、勝利を得たのはディムズデールのみであった。

ここに、ホーンズが植民地時代のニュー・イングランドの世界を越えて、我々に示そうとする彼の "a dark necessity" の見解があり、それは表面や過程に於いては、暗いものであるけれども、正しく神の恩寵を受け入れた人間には、ディムズデールに具現したように、"light" を約束するものであると言えよう。

註

① Cf. Roy R. Male: *Hawthorne's Tragic Vision*, Austin, University of Texas Press, 1957, pp. 92-93.

例えば、John C. Gerber は『群文字』には発展的な段階が四つあって、それぞれが一つの主題をもった完全な部分をなしていると考えている。

その四段階とは次の如くである——。

Part I (Chapters I-VIII) — Community that instigates the actions.

Part II (Chapters IX-XII)—Chillingworth.

Part III (Chapters XIII-XIV)—Hester.

Part IV (Chapters XX-XXIV)—Dimmesdale.

又 Anne Arle MacNamara 著『織女詩』はノーホー・ホ
ー・イ・ス・キーンルを中心とした物語である。彼の精神の探照鏡
也。

1. Preparation (Chapters I-XVII)

2. Communication (Chapters XVIII-XIX)

3. Transformation (Chapters XX-XXII)

4. Revelation (Chapters XXIII-XXIV)

小説の「結末」として。

② p. 198

③ この中の四人の中心人物の象徴的意義は、この
Hyatt H. Waggoner 著次の文章を参照しよう。

“Hester” is a modern form of “Esther”; and the Old Testament Esther is gifted with beauty, strength, and dignity. Courageous and loyal, she defends a weak and oppressed people. The obvious parallel between the two women contributes one more implication that Hester is to be seen as finally “in the right.” And it offers another bit of evidence to those who like to stress the feminist implications of the novel, for we may see the “weaker sex” defended by Hester as but a variant of the weak people defended by Esther.

The minister's first name, Arthur, tends to suggest that devotion to a high ideal associated with King Arthur. It is at once descriptive and ironic as the name of Hester's partner in adultery. His last name falls naturally into two parts, with the root of the first part, “dim,” suggesting both weakness and darkness, and the second part, “dale,” suggesting, in its meaning of valley, the heart, of which

Hawthorne is so frequently reminded by any hollow, opening, or cavity.

...“Chillingworth” is also made up of two parts, the first of which suggests coldness and the second merit or worthiness. It is a name more transparently descriptive of this man than Dimmesdale is of the minister. For Chillingworth has, as he acknowledges to Hester, a cold heart, and his sin is one of the cold sins. Yet he was once a worthy man: decent, self-controlled, law-abiding, scholarly, “good” as the world tends to measure goodness, with nothing lacking except the most important thing of all, charity....

Pearl...gets her name from the “pearl of great price” used in St. Matthew to suggest the incomparable value of the hope of heaven. Hester's initial mood of bitter rebellion against her situation is clear in the naming of her child.

(Hyatt H. Waggoner: *Hawthorne, A Critical Study*, Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press, 1955, pp. 138-139)

④ F. O. Matthiessen 著 “device of multiple choice” 句は
小説の「結末」として。 Cf. *The American Renaissance*, New York, Oxford University Press, 1941, pp. 276-277.

Malcolm Cowley 著『織女詩』はノーホー・ホー・イ・ス・キーンルを中心とした物語である。彼の精神の探照鏡也。

Cf. *The Portable Hawthorne*, ed. by Malcolm Cowley, New York, Viking Press, 1948, p. 13. R. H. Fogle 著
“the true conclusion of *The Scarlet Letter* is an unresolved contradiction—unresolved not from indecision or lack of thought but from honesty of imagination” 云々

Cf. *Howthorne's Fiction: The Light and the Dark*, Norman, University of Oklahoma Press, 1952, pp. 104-105.

⑥ Henry James: *Howthorne* (English Men of Letters Series) (1887), Great Seal Books, New York, A Division of Cornell University Press, 1956, p. 87.

⑦ 『鏡文字』の中には、合計八回「鏡」の象徴 (mirror symbol) が現われる。それぞれの場合、「この「鏡」はそれを見る人のイメージや場面の情景と密接な関係がある象徴である。これらの「鏡」の象徴は次の如くである。

1 ハスターがパールの中の悪魔 *demon* が写りこむのを見る鏡。(Chapter VI, p. 110)

2 パールがヘリンガム知事の家の広間にある甲冑が凸面鏡で見え、その中に巨大な緋文字だけが歩く罪の化身としてハスターを見る鏡。(Chapter VII, p. 120)

3 過去と未来の接触を象徴する鏡。(Chapter VIII, p. 131)

4 デイムズデールが自分の墮落の姿を見る鏡 (Chapter XI, pp. 164-165)

5 チリングワースが自分の悪の姿をイメージ・メンを通じ見る鏡。(Chapter XIV, p. 195)

6 パールが自分を悪く招く *visionary little maid* が森の小川の淵に写っているのを見る鏡。(Chapter XIV, p. 191)

7 束の間の人間の生命を象徴する鏡。(Chapter XVI, p. 212)

8 パールが小川で見る未来を象徴する鏡。(Chapter XIX, p. 237)

⑦ この小説は二十四章からなっており、前半の十二章は外面的発展が、後半の十二章は心の問題、救済の問題が中心になっている。デイムズデールの「探求」は特に第九章から第十一章迄 (“The Leech,” “The Leech and His Patient,” “The Interior of a Heart”) と第十七章から第二十章迄 (“The Pastor and

His Parishioner,” “A Flood of Sunshine,” “The Child at the Brook-Side,” “The Minister in a Maze”) の間に展開をたどると言える。ハスターが新世の社会 (環境) と影響を及ぼすのは、第二章 (“Hester at Her Needle”)、第八章 (“The Elf-Child and the Minister”)、及び第三十一章と第三十二章 (“The New England Holiday,” “The Procession”) に於て語られる。

チリングワースの「探求」は特に第四章 (“The Interview”) と第十四章 (“Hester and the Physician”) の主題である。

パールの「探求」或は運命とも言えるものは、第六章から第八章 (“Pearl,” “The Governor’s Hall,” “The Elf-Child and the Minister”)、及び第十五章と第十六章 (“Hester and Pearl,” “A Forest Walk”) と示される。

更に、規則的な間隔をおいて処刑台が現われる章があるが、これらの章は作品解明の鍵となる章であって、展開されている色々な事件、行為を象徴的要素とされている。これらの鍵となる章では、夫々違った形で、恐怖の念を起させている。第二章 (“The Market Place”) のハスターの胸の緋文字は女の罪を、第二十三章 (“The Revelation of the Scarlet Letter”) のデイムズデールに顯われる啓示は、人間には誰れも罪があるということを示している。第十二章 (“The Minister’s Vigil”) に描かれてくる天に写ったほこやろとはじまっているが、燃えているような「A」の文字は全ゆる世界にある罪の重大性を表わしている。これらの章が、第一章 (“The Prison-Door”) と第二十四章 (“Conclusion”) というこの小説のテーマを象徴的に示見させる二つの章で結ばれていると言えらる。

⑧ Hyatt H. Waggoner: *Op. cit.*, pp. 120-121.

⑨ ヒビンス (Mistress Hibbins) というのは、ヘリンガム知事の悪性の妹で、数年後には妖婆として処刑された人物であるが、此処では、ハスターとパールを森の中へ誘って、妖精になることをこきりと勧誘する。

“Hist, hist!... With thou go with us to-night? There will be a merry company in the forest; and I wellnigh promised the Black Man that comely Hester Prynne should make one.” (p. 132)

註⑨参照。cf. Mart. 13: 45-46.

珍書・怪書

『ホーソンの最初の日記』

Hawthorne's First Diary. Ed. S. T. Pickard.

Boston: Houghton Mifflin, 1897

『主流』の先号に金関寿夫氏の「ヘミングウェイの詩集について」というたいへん興味深い記事があった。この記事の資料になった『ヘミングウェイの詩集』というのが一種の海賊版の珍書であるらしい。いま私の手許にある『ホーソンの最初の日記』というのも、この詩集に似た書物である。ただ、この『日記』の出版者や編者はれっきとしているから決して海賊版ではない。公けに出廻った書物だから必ずしも珍書ではない。尤も、一八九七年の出版だから、どこにでもあるとはいえないだろう。その意味でなら、この書物を珍書と考えてよいかもしれない。けれども、この書物は何をさておいても怪書である。

R・スチュワートの伝記によれば、一八一六年、ホーソンが十二歳の夏、ホーソンの母はメイン州のレイモンドに移り、兄ロバート・マニングの家に住んだ。ホーソンはボードン・カ

ちとがき——本項を執筆するに当り、Hugh N. Maclean, “Hawthorne's Scarlet Letter: The Dark Problem of This life” (*American Literature*, March 1985) に負ふべしと云ふ事とを附記する。

レッジに入るためこの地を去った一八二一年の十月までここに住んだ。『ホーソンの最初の日記』はこの時期に書かれた日記といわれているものの一部である。といわれているという表現は、瞬時そのものであるが、実はこの日記の編者Pickardは日記の実物を見ていないからである。

この辺りからいささかミステリーめくが、出版までの事情はあらかし次のようなことになっている。編者ピッカードがメイン州のある新聞社に関係していた頃、W・Sと署名のある、自称レイモンド時代のホーソンの親友だという男からホーソンの日記を所持している旨の手紙を受け取った。このW・Sと名乗る男は、日記の一部を少しづつ写して送るから、出版する気があるのなら発表してくれ、報酬などいらない、と云うのである。日記の一部が、本人の言に依れば、忠実に写しとられて送られて来て、その内容に基いて編者が実地に調べたり、第三回の送付分までを新聞に発表して得た反応から見た限りでは、日記中に言及されている人物や描かれている事件はそれぞれ裏付があつて、どうやらこの日記は本物らしいという結論が出た。ところが、日記の写しは第三回を最後に途絶えてしまった。そのころやっとわかった W. Sims という名と (44頁に続く)